

関野貞資料の調査・公開と東アジア建築文化財学への貢献に関する 一連の業績

正会員 藤 井 恵 介 君

早乙女 雅 博 殿

正会員 角 田 真 弓 君

わが国の建築学に関わるアーカイブ、つまり記録や資料の整理・保存はきわめて遅れた状態にある。ようやく、いくつかの大学等でアーカイブに取り組む例も出てきたが、緊急避難的な性格が強く、その対象も設計図面を中心としたものに限られている。写真や建築標本なども含めた幅広い建築資料を体系的に収集し、研究まで進めている事業はきわめて少ないのが実情である。日本建築学会では、そうした現状を踏まえて、2003年より建築会館内に建築博物館を開設し建築資料の保存・展示を進めてきたが、そのアーカイブの一つとなっている伊東忠太資料は、資料の整理にとどまらず建築家研究にまで至る活動を行った点において、わが国の建築アーカイブ事業を先導するものとなったと言えるだろう。

当業績である関野貞資料の調査・公開の一連の仕事は、まさにこれに続く本格的なアーカイブ事業である。伊東忠太と関野貞はともに、わが国において建築史学を創始した人物である。その意味で、伊東忠太に続き、関野貞の資料アーカイブが進められたことは、こうした事業が遅れているわが国の建築界にとって、きわめて有意義なことであった。

ただし、二人の残した資料をアーカイブの対象とするための手法やその意義は、資料の内容から大きく異なることになる。伊東忠太は日本の建築史を構想した人物だが、その内実を構築したのが関野貞であると言えるだろう。彼は、古建築から、関連する美術品や古墳まで細密な調査を行い、文化財保護事業の立ち上げにも深く関わった。したがって、関野貞が残した資料はきわめて具体的で緻密で多様である。とりわけ、朝鮮半島や中国に渡り収集した建築標本や、撮影した写真類はその特徴をよく示すものである。当業績のアーカイブ事業では、そうした資料も含めて、東京大学の各所に保管されていた、標本、写真、論文草稿、日記、行政文書などの膨大な資料を、時間をかけ丹念に整理し、目録の作成、展覧会の開催、書籍の公刊などを通じて、その成果を広く普及・公開につとめたものである。また、画像については、積極的にデジタル化も進めている。

このアーカイブ事業の最大の特徴は、こうした多種多様で大量な資料を対象としたために、関野貞という研究者の個人研究にとどまらない意義を持つことになったということであろう。特に、関野貞が収集した東アジアの建築・美術標本などは、美術史や文化史研究にとって大きな価値を持つことになる。中国や韓国では、文化財の旧状を伝える情報が少ないという現状もあり、関野貞の残した資料はきわめて貴重なものとして評価されるものとなる。そこで、このアーカイブ事業では、建築史だけでなく、アジア史を専門とする研究者も共同して研究会を立ち上げ作業を進めている。そして、アーカイブ事業により収集・

整理された資料をテーマにして、学際的なシンポジウム等も積極的に行ってきた。このことは、建築に関わるアーカイブを、学際的な場を開いていくという点において、大きく評価されるべき点である。

このアーカイブ事業の成果を通じて、関野貞自身についての研究、また東アジアの文化財学における研究が飛躍的に進んだというわけではかならずしもない。しかし、少なくともそうした研究の基盤を築いたことは事実である。関野貞が行ってきた仕事の実際を知ることができたこと、そして東アジアの建築文化財学を進める契機となったことなどから、このアーカイブ事業の果たした役割は十分に大きいと判断されるのである。この業績は、単に先進的なアーカイブ事業であるというだけでなく、その資料が持つ可能性を開き、資料から研究を開く道筋をも開拓したという点において、きわめて功績の大きいものである。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。